

令和5年度 都留市立東桂中学校 学校経営方針

〈解説〉

はじめに、学校経営方針を提案するにあたり、組織の「文化」づくりと「風土」づくりということをはっきりと分けて考えていきたいと思えます。一人ひとり異なる個人が一つの統一体として進んでいくとき、何をもって共通の基盤とするのかということが重要になります。その際、その基盤は、個々が「意識して」創っていく必要があります。「意識して」創っていく組織のありようをここでは「文化」と考えます。そして、「意識して」創ることを「くり返す」ことで、その組織のありようは、個々の構成メンバーの「あたり前」となります。「あたり前」とは、「無意識」のうちにあるものです。そのようになった組織のありようのことを、ここでは「風土」と呼びたいと思えます。つまり、「意識的側面」を「くり返す」ことにより「無意識のありよう」を創り出していき、よりよい「組織風土」を創り上げていくことが重要だと考えています。

そこで、これから提案する学校経営方針は、本校教職員で、まずは「意識して」「くり返し」創り上げる努力をする事柄になります。『「お飾り」ではなく、「常に立ち返り、振り返る」ための指針』ということです。まずは、学校経営方針をこのように捉え、組織づくりを進めていきましょう。

私は、東桂中学校でこれまで展開されてきた教育実践や教育活動を大切に、継承したいと考えています。そして、先生方のよさを生かしたこれまでの東桂中学校の教育を大切にしたいと思っています。そのような学校づくりを通して、一年後には、それぞれのスタッフがそれぞれの立場で「すごく勉強になった！自分の力がついた！よい経験ができた！」と思えるような、「学習する組織」を創っていただけたらと思っています。以上の事柄は、学校内ではいろいろな職や立場があるわけですが、全員にとって、そういう学校であって欲しいと願っています。

これからお示しする学校経営方針は、ただでさえ多忙な学校現場の先生方に、あれをしてほしい、これをしてほしい、という意図でお示しするものではありません。この方針を通して、理念、目標、意識、取組・実践の方向性を皆で「揃えたい」と思っております。「お願い」的に記述してあることも、「しなければいけない」という意味ではなく、「先生方に、そういう視点を持って、それぞれの教育実践の質を高めるための指針の一つにして欲しい」という意味であると捉えていただければと思います。管理職だけでなく、最前線でご活躍される先生方には、学校づくりの当事者として、昨年度まで実践してきた本校の学校経営方針について、改めて深く見つめ直してみる機会にさせていただきたいと思っています。

国による各種答申や指針・学習指導要領等の内容を受けた山梨県指導重点、都留市学校教育指針に基づいたこの大方針を、先生方や各校務分掌等の各分担・小組織における個々の教育実践のベクトルを同じ方向に向かわせるための指針にして、各学年や各生徒、保護者等の状況・実態に応じ、適切に実践していただければと思います。

そこで考えてみたいことは、まず、「学校経営方針とは何か？」ということです。私は、昨年度までを継承する本年度の学校経営方針には、次のような要素が含まれていると考えました。

1. 経営ビジョン

- (1) 教育ビジョン…どのような教育を行いたいのか、どのような学校の姿を目指すのか、という目標。教育そのものの中身。
- (2) 学校組織ビジョン…上記の目標や中身を達成するために、どのような学校組織づくりが必要か。
- (3) 教職員ビジョン…上記までの事柄のために、どのような教職員でありたいか、ある必要があるか。

2. 経営戦略…上記ビジョンを達成するための方針・方策。どの道を選んで目標を達成しようと思うのか＝その学校の特色をどのようにして創るのか。 ※例えば、探究学習を重視する、など。

3. 経営計画…上記戦略を具体化した施策展開や数値計画。 ※例えば、学年の計画、部門・分掌などの計画、カリキュラム・マネジメントなどのPDCA。

今回、先生方がこれまで行ってきた優れた教育実践に関わって、本校の学校経営方針が、学習指導要領他の、どのような事柄に紐付いているのか、ということをも改めて整理してみたいと思えます。

学校経営や学校運営は、管理職だけが行うものではなく、一人ひとりの教職員の目の前で実現していくも

のだと考えます。不易を大切にしつつ、新しい時代に向けた新しい教育の在り方は、実は、先生方が教育活動を展開する実際の教室の中で「具現化」されます。そういう意味で、自らの行う教育実践や業務は、直接的に学校経営や学校運営につながっているということを共通認識にして一年間お願いしたいと思います。

これから、本学校経営方針が持つ意味・意義について説明していきたいと思います。

1 学校教育目標

〈解説〉

本学校教育目標は、昨年度までと同様です。「令和の日本型学校教育」でも述べている日本の教育の特徴である「知・徳・体」を一体的に育成しようとする東桂中学校にとって、継続すべき、ぶれてはいけない目標であると考えます。なぜなら、東桂の地域に根ざした東桂の水の中で、これまで大切にされてきた目標であるからです。

基本目標

「 広い視野と豊かな心を持った、健康でたくましい生徒の育成 」

〈解説〉

ただし、ここでは、「広い視野」と述べています。この「広い視野」ということの意味を先生方が自由に発想し、創意工夫して実際の教育実践に落とし込んでいただければと思います。ここで、「広い視野」に関連し、ひとつだけ言えるのではないかと私が思うことは、「教室や学校だけに閉じた教育実践にしない」ということです。学習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱のうちの一つは、「学びに向かう力・人間性等（の涵養）」ということです。この資質・能力の言葉の前についている文言は何だったのでしょうか。私は、その文言がとても大切だと思っています。それは、「学びを人生や社会に生かそうとする」学びに向かう力・人間性等の涵養ということです。これは、「学校だけに閉じた教科の授業を行わない」「学校だけに閉じた道徳の授業を行わない」「学校だけに閉じた特別活動を行わない」ということであると思うのですが、いかがでしょうか。学級経営においても、一年後、「みんなはよいクラスをつくりました。すばらしい！」だけで終わらない、ということです。ポイントは、「一年経てば無くなってしまうような学級を、なぜよりよいものにする必要があるのか？」ということだと思っております。いずれは消えて無くなってしまふものを創ること、どのようなことが自分の人生や社会に起こるのか、ということです。そういうことを生徒がわかって、この東桂中学校を卒業していく必要があると思っております。

生徒たちの「時間」と「空間」を、学校の中だけで捉えさせるのではなく、教室外へ広げて捉えさせるようにしていただけたらと思います。「時間」とは、自分のこれまでとこれからの人生とのつながり、10年20年後の自分とのつながり、自分が生まれる前、自分が人生をまっとうした後のつながりということです。「今日学習したことは、自分の人生の10年後とどのように関係があると思ったか？」などと振り返らせて欲しいと思います。また「空間」とは、自分を中心に、半径10cmではなく、それ以上に広げて、地域・山梨・国全体・世界（場合によっては宇宙）ということです。そういう、時間と空間とのつながりの中で自分の学びを捉えさせていただきたいと願っています。「今日の授業は、毎日の自分の生活とどのように関係があると思ったか、地域や国、世界の在り方とどのように関わりがあると思ったか？」というふうに捉えさせていただきたいと思っています。

具体目標

- 健康でたくましい生徒
- 人の心の痛みが分かり，思いやりのある生徒
- 進んで学び，感動できる生徒
- 規律を守り，責任を果たす生徒
- 厳しさに耐え，自ら努力する生徒

〈解説〉

基本目標に到達するために，5つの具体目標（小目標＝スモールステップ）を設けています。先生方には，ぜひ，この5つの具体目標の本当の意味を自分自身や学年等の組織の中に落とし込んで欲しいと思っています。

「健康でたくましい」とはどういうことでしょうか。日本よりずっと貧しい発展途上国の子供が，「貧しくて紛争ばかりしている自分の国を，政治家になって救いたい」「自分の親のように病気で亡くなる人を医者になって無くしたい」などと考えて，鉛筆や紙など手元になくても，乾燥した大地の上に指や棒きれで文字を書きながら一生懸命学んでいる現実を知ったときに，東桂中学校の生徒たちは，「健康でたくましい」ということをどのように考え，自らの生活や人生の中に生かそうとするのでしょうか。

「人の心の痛みが分かり，思いやりのある生徒」とは，教科の授業の中で，特別活動の中で，どのような生徒の言動や姿をいうのでしょうか。今次学習指導要領において重視されていることは，目指す目標に照らし合わせて，その目標を実現している実際の生徒の「具体的姿」とはどのようなものなのかをしっかりと描いて欲しい，ということです。その，テストの得点のような数値だけではない，「生徒の具体的姿」のことを「評価規準」と言っています。「評価規準」をしっかりと描いて教育実践し，「評価規準」に照らし合わせて生徒の姿を見取っていくことが重要です。

また，「進んで学び，感動できる生徒」とあります。「学び」と「感動」をセットで述べているのです。先生方はこのことをどのように解釈しますか。どのように教育実践に落とし込めるのでしょうか。「進んで」ということは，未来社会や未来の自分のことを考えるからこそ生まれてきます。それは，「意欲」ということであり，「興味・関心」ということです。それをどのように喚起したり高めたり強めたりするのかという，指導者側からの視点で捉えれば，「動機付け」や「主体的に学習に取り組む態度の育成」ということになります。したがって，私たち教職員は，「動機付け」や「主体的に学習に取り組む態度の育成」についての原理を知っておく必要があります。そして，そのことを実態に即して具体的な教育実践に落とし込む必要があります。このような教育実践が，学校や先生がいなくなった自分の人生のステージで，自ら自分の人生や社会の問題に立ち向かっていく力（生涯にわたって学び続ける力）につながっていくと考えられます。

続いて，「規律」と「責任」がセットで述べられています。これもどういうことでしょうか。生徒の具体的な学校生活の姿では，例えば，どのような場面のどのような姿を言うのでしょうか。

最後になりますが，「厳しさに耐え，自ら努力する生徒」とあります。これは，何かしらの特色ある私立学校を除き，近年の日本の学校教育ではあまり目にしなくなっている傾向の文言だと思います。しかし，これが東桂という地域の中の東桂中学校らしさなのかなと個人的には感じています。このように，強さを前面に出しても，昨年度までの様子も窺うに，「寄り添うこと」も忘れない，そういう教育が東桂中学校らしさのように感じます。人生は山あり谷あり。その現実を，耳触りのよい言葉だけで覆うことなく，ストレートに述べている本目標を通して，東桂中学校の教育（先生方）の，生徒に対する真の誠意・真心・正直さ，生徒たちに対する深い愛情を感じます。

《目指す生徒像》

「あたり前を大切に、恩を感じ取り、未来社会に向かって、気づき、考え、実行する生徒」

〈解説〉

昨年度において、「あたり前」の説明として、「健康管理」「交通安全」「授業」「家庭学習」「部活動」等々と述べている資料を拝見しました。生徒たちの発達段階に応じてわかりやすく「あたり前」の内容を提示したり考えさせたりすることはとても大切なことであると思います。しかし、これら「具体的なあたり前の各項目」が、「人生や社会のどのようなことにつながっていくのか」ということを常に意識して、前述したように、「学びを人生や社会に生かそうとする」という側面を重視して支援・指導にあたっていたらと願います。

また、「恩を感じ取り」という文言を入れました。昨年度は、「不易と流行を意識して欲しい」との考えが学校経営の方針に込められていましたが、その「不易」の部分で、「恩を感じ取り」としました。生徒たちが、自らの人生に意欲を持って向かっていくには、『自分が今、生きていられることの原「因」を感じる「心」の働き』が必要です。

例えば、現在では、「子供というのは周りの環境をできるだけ良いものにするによってよりよく育つ」との仮説に基づいて教育政策が考えられ、実施されています。高校での就学支援金、義務教育費無償、教科書無償配布、都留市でも実施されている給食費無償や医療費無償、教材の公費負担、家族による私費負担等です。これからは、高等教育の公費負担や、奨学金の貸与型から給付型を主流にしていくこと等も検討課題として挙げられています。これらにより、国をはじめとした公的部門はより質の高い教育の機会均等を図ろうと努力し、着実に成果が上がってきている部分もあると思います。確かに、経済的側面によって未来ある子供たちの学びや教育の機会が奪われてしまうことはあってはなりません。これは、社会全体で取り組んでいくべき重要課題です。しかし、この流れが益々進んだとき、学校現場は人間の際限ない欲の波にさらされてしまうことにならないかとも考えてしまいます。つまり、「こんなものではとても足りない」「もっとやってもらべきだ」というように、「やってもらってあたり前」という風潮により、子供たちの健全な育ちが阻害されてしまわないかと心配になってしまうのです。子供たちの健全な成長のため、教育問題・政策問題として大人がこのように議論することは大切なことであると思います。しかし、成長途上の子供たちにとってはそれだけでよいのだろうか考えるのです。学校教育現場は、あくまでも子供たちの「心」を育てていく場です。私たちはこれまで、社会全体が、ふるさと都留市が、このように自分たちの成長のことを考えていろいろやってくださっているということを事実としてしっかり子供たちに伝え、そのことをどのように受け止めて自分づくりをしていったらよいのかということ、学校教育の中で真正面から扱ってきただろうかと思うのです。「何のために社会全体がこのような支援をしてくれているのか」ということを真剣に考えたとき、一人ひとりが益々大切にされる世の中へと変わってきているということがわかるようになると思うのです。

このようなことを実感できたとき、子供たちは自らの命や人生の尊さに改めて想いを馳せ、自分も他人も大切に生きていこうとするのではないのでしょうか。このようなことが実現できたとき、「社会全体の子供たちへの思い」と「子供たち自身の、自分を成長させていこうとする思い」が一致し、世代間で人間としての大切なこと（不易）がしっかり継承され、持続可能で発展的な社会が創造されていくように思います。ですから、基本目標にある「豊かな心」の基盤は、「恩を感じ取る心の働き」と考えたいと思います。各教育活動の中で、「恩」ということに目を向けさせるようにしていただけたらありがたいです。

そして、「未来社会に向かって」というところにも注目していただきたいです。基本目標に「広い視野」とありますので、「未来社会に向かって」という文言を付け加えました。先生方もご承知のように、未来社会は絶対的な正しい答えというものは存在しない（よくわからない）社会です。従来のペーパーテストのように、一つの答えが唯一の正解となるような社会ではないのです。そのような社会においては、まず、自分の身の周りや社会の問題について「気づく」力が必要です。そして、その問題を解決すべき課題として整理して捉え、「考え」て、未知の事柄に対して、絶対的な答え（絶対解）でなくとも、多くの人々が納得できる「納得解」、その時点で最適だと考えられる「最適解」として答えを導き出し、「実行」していくことが必

要です。これは、学習指導要領で、いろいろな状況や場面において必要とされる汎用的な能力として整理されている、「問題発見・解決能力」ということにあたります。

問題を発見して解決に向かうためには、必要なことを、ICT等も駆使して調べたり新たに学んだりして、知識を得て、物事に対する理解を深め、知識を生かし使って考える必要があります。このように知識を得る過程で、必要な道具や技術を使って調べたりする技能も身に付けていく必要もあります。思考して答えを得るためには知識や技能を活用することが必要です。これは、学習指導要領の中で汎用的な能力として整理されている「情報活用能力」に通じるものです。そして、こういった自分なりの答えを産み出すためには、自分一人の中だけでなく、多様な他者（人・周囲の文物・文献・先哲の考え等）から学び、自分の考えを深めていく必要があります。このような対話的・協働的学びを進めるためには、汎用的な能力である「言語能力」が重要です。もちろん、「言語能力」は自分の頭の中で考える際にも重要な能力です。

以上述べたように、私は、本校の「目指す生徒像」は、学習指導要領の言う、「三つの汎用的な能力」と「資質・能力の三つの柱」にあたるものであると考えます。それは、整理すると以下の内容です。

一 育成すべき資質・能力の三つの柱一

- 「生きて働く」 知識及び技能
- 「未知の状況にも対応できる」 思考力・判断力・表現力等
- 「学びを人生や社会に生かそうとする」 学びに向かう力・人間性等
(教科の授業においては、「主体的に学習に取り組む態度」)

この三つの資質・能力の育成をあらゆる学びにおける目標として設定し、育成していくことが大切です。その育成の過程で「汎用的な能力」である、「問題発見・解決能力、情報活用能力、言語能力」も育成していく、という関係性になっていると考えられます。

三つの柱については、私は、上記三つの資質・能力の、かぎ括弧の部分が最も重要であると考えています。それはすなわちこういうことです。

- ・知識や技能を「生きて働かせる」活動や授業の設計になっていますか？
- ・「まずは知識を教えなければこの課題はできない」という潜在意識・固定観念はありませんか？
- ・「まったく新しい単元だとしても、その単元に関わる生徒の知識や経験はまったくゼロではなく、そのわずかな知識や経験を生かす」という授業設計になっていますか？
- ・活動や授業の中で、「未知の状況」に出会わせてあげていますか？
＝「未知との遭遇」の中で「もがく」授業、「答えを産み出す」授業になっていますか？
- ・「決まりきったことを指示されたとおりに行う」活動や授業になっていませんか？
- ・「教室の中だけに閉じた活動や授業」になっていませんか？
- ・「人生や社会、学ぶことの意義の理解や自覚」と切り離された活動や授業になっていませんか？

これらを、東桂中学校の教育の質をより一層高めていくために、支援・指導の改善・授業改善の視点として捉えていただければ幸いです。職員会議や学年等での提案や教育実践の最中において、このことを従来より少しだけ意識して、従来の目標設定を少し整理して、「資質・能力の三つの柱立て」により提案したり共有したりするようにならなければありがたいです。

《目指す学校像》 「地域が誇る東桂中学校」

- ① 生徒が、よりよく生きる意欲・学ぶ意欲を持ち、「楽しく、明日も来たい」と実感できる学校
- ② 教職員が相互に信頼し合い、助け合い、やりがいと誇りを持てる学校
- ③ 家庭・地域とのつながりを大切にしたい、開かれた、信頼される教職員が集っていると思っ
ていただける学校」

〈解説〉

この「目指す学校像」の言葉から私が思い出すのは、3学年主任をしていたときのことです。私は修学旅行前日の結団式の日（日曜日）に、保護者を招くことにしました。そのときの修学旅行では、奈良・京都・広島を訪ねる予定でした。私が常々思っていたことは、どのような修学旅行になるのかを保護者が知らない、ということでした。学校側が、学びの多い修学旅行になるようにと強い意図を持って計画する修学旅行ですが、その内容を保護者が知ることにより、教育効果がさらに高まると思ったのです。そこで、結団式では、従来の通り一遍の結団式ではなく、広島で行う予定の活動を、そのまま保護者の前で行うことにしたのです。その姿を見せ、「私たちは、このような修学旅行に行ってきたと思います。このような修学旅行のために、これまで大金を積み立てていただき、ありがとうございます。お父さん、お母さん、家族の愛情にしっかり応え、将来は社会の役に立つ人間になれるよう成長できる修学旅行に行ってきます」というような生徒代表の言葉と共に結団式を締めくくりました。

この結団式は、学年行事として考えていましたが、最終的には1学年も2学年も参観するように当時の学年主任の先生が計画してくださり、結果的には全校行事の形になりました。当時の学年主任の先生の考えには、『全体や他の部署の教育活動と「関係付ける・関連付ける・連携する」中での自分の分掌での教育活動』という意識やねらいがあったのだらうと思います。これも、カリキュラム・マネジメントの一つの姿であると思います。もちろん、私自身も、他の分掌や他の先生方が行う教育活動等にはたくさんの機会にお世話になり、力をお借りしてきました。

結団式に話を戻しますが、修学旅行現地での生徒たちへのフィードバックで活用できるようにと、その結団式でのアンケートも保護者から取っておきました。そのアンケートの内容は、今でも鮮明に覚えています。それは次のようなものでした。

「学校で、このような教育をしてくれているということをはじめで知りました。本日のような子供たちの発表を見て聴いて、本当に感動し、鳥肌が立ちました。このような教育を本当にありがとうございます。家に帰り、しっかり学んでこい、と送り出したいと思います。自分の子供が、このような学年に所属できていることに感動し、誇りに思います。」

地域や保護者が、学校に対して誇りを持っていただけるのは、①にあるように、生徒たちが、よりよく生きる意欲・学ぶ意欲を持ち、「楽しく、明日も来たい」と実感してがんばっていることが適切に伝わるときなのではないでしょうか。そして、そのために教職員が生き生きと働き、心を開いて地域や保護者と接し、質の高い教育をしてくれているということが伝わるときなのではないでしょうか。そういう意味で、「地域が誇る」ということにおいては、私たち教職員には「相手意識」を持つことが必要だと考え、③の語尾は、『…開かれた、信頼される「教職員が集っていると思っただけの」学校』としてみました。

ちなみに、「地域とのつながり」と言ったときには、「小学校との接続・連携」ということも含まれます。

生徒たちは、中学校に入学した時点で、すべてが「ゼロ」というわけではありません。小学校6年生までに培ってきた力やプライド（誇り）を大切にあげることが大切だと思います。

昨年度まで、生徒たちも先生方も、「地域が誇る学校づくり」ということについて、かなり高い意識とレベルで実践してきているということを伺っています。本年度もぜひ、目指す学校像の中心に置いて生徒たちを育てていって欲しいと願っています。

—ここまでのまとめ—

「広い視野と豊かな心を持った、健康でたくましい生徒の育成」を実現するために、5つの具体目標（小目標）を目指した教育活動を展開しましょう。そのために、より具体的には、目指す「生徒像」と「学校像」を実現する教育実践を行っていきましょう。

《めざす教師像》

- ① 自他の心身の健康を大切にする教師
- ② 生徒に寄り添い、一人ひとりを大切にし、真心と情熱をもって教育に取り組む教師
- ③ 気持ちの良い返事と挨拶ができ、相互に助け合い、人との関わりを大切にする教師
- ④ 家庭・地域との相互理解・連携に努め、信頼され、愛される教師
- ⑤ 専門職としての誇りを持ち、協働性・同僚性の中でチーム（組織）の一員として、常に研鑽し、よりよく生きる意欲・学ぶ意欲に満ちた教師
- ⑥ 持続可能な東桂中教育を工夫・改善する教師
- ⑦ 教育公務員としての使命を自覚し、その職務に厳正な態度で取り組む教師

〈解説〉

①については、すべての基本だと考えます。何より大切なのは、先生方の「心身の健康」です。誰もが幸せな人生を生きる権利を持っています。そのことをしっかり心に留め、勤務していきたくと思います。

②については、社会生活をする上であたり前のことではありますが、①と同様に、生徒も一人ひとりが大切です。その生徒一人ひとりに寄り添い、真心と情熱をもって接していけたらよいと思います。

③は、その次の④、⑤とも関連するのですが、個の中に閉じることなく、外に開かれた個々の意識や連帯を大切にしていきたいと思っています。例えば、学校内だけでなく、地域や外部の業者の方々などに対しても、意識して挨拶や親切な応対ができる学校でありたいと思っています。業者の方々は、他の多くの学校にも出入りしています。必然的に、各学校の違い（教職員の違い）を口では言わなくとも感じています。「東桂中学校はいいね」と思わせる学校でありたいと願います。また、電話応対においても、「いいな」と相手を感じる親切や明るさを心がけていただきたいです。電話に出るときには、まず、学校名と名前を名乗りましょう。保護者や地域の方々の中には、客商売の人やビジネスマナーがあたり前の方など、ホスピタリティの専門家もいることでしょう。そういった方々にも、「さすが先生だね」と思っただけのことが、保護者や地域からの信頼につながると思います。そういう、小さな積み重ねが、「地域が誇る東桂中学校」につながるのではないかと思います。これまでも十分意識されていると思いますが、改めて確認させていただきました。

④については、その大切さはどの先生も実感しているところであると思います。子供たちは地域の中で育っていきます。家庭や地域が時代と共に変容してきているということはあると思いますが、学校だけが独立して存在しているわけではありません。国の政策でも、教育の面からの学校の存在意義だけでなく、地域づくり・地域振興・地方創生といった面からも、子供が集う学校の存在意義が語られています。日常の小さな応対の積み重ねによって、地域の中の学校として信頼感も増していくように思います。

次に、⑤についてです。まず、先生方にしっかり自覚しておいて欲しいことは、自己研鑽のようなそれぞれの先生方の「自律性」「独立性」に基づいた「自主・向上性」と、自分以外の人々との関わりを対象にした「協働性・同僚性」とは、共に非常に重要なものであるにも関わらず、基本的には相反するベクトルだということです。教育という仕事（学校における教職員の仕事）は、本来は高度に「自律性」と「独立性」の高いものです。学級一つとっても、学級担任の学級経営は、学校教育目標や方針を受けながらも、多くが学級担任の創意工夫に任せられています。それは、各教科の授業においても同様で、たとえ学校長であっても容易に立ち入れないくらいの雰囲気を持っています。子供は師弟関係の中で育っていくので、教育という営

みにおいては、このような当事者同士の「自律性」や「独立性」は、本来必要なものと考えられます。自由が保障された「独立性」と「自律性」があるからこそ、「創意工夫」「試行錯誤」が生まれます。医者による外科手術をAIやロボットによる遠隔操作で行う技術が研究されていますが、これは手術法が確立されているからこそできることなのだろうと思います。しかし教育の仕事は事前にプログラムすることのできない、「創意工夫」「試行錯誤」の連続の仕事であるので、AIでは代替できない仕事の一つであると言われていいます。「自律性・独立性」と「創意工夫・試行錯誤」はセットなのです。

このように、「自律性」「独立性」に基づいて自分を高めようと努力することはとてもよいことですが、それだけだと自分だけの世界となり、「協働性・同僚性」の要素が薄くなります。反対に、周囲と仲よしだけだと、よりよい教育を追究するという専門家としての力量をないがしろにすることとなり、「協働性」という面でも、一つの目標に向かって挑戦するということが薄くなり、「なれあい」の関係になりがちになります。「まあ、こんなものでいいか」という、創意工夫や試行錯誤をして挑戦することのない「なれあい」による教育実践が生まれるのです。ですから、「自主・向上性」と「協働性・同僚性」というのは、本来は相反するベクトルだと言えます。

しかし私たちは、「チームとして」「組織として」この東桂中学校をよくしていかなければなりません。「自主・向上性」と「協働性・同僚性」の相反するベクトルの双方が高度に要求されます。ですから、「協働性・同僚性」の中で「チーム（組織）の一員」として「自主・向上性」としての自己研鑽に励む必要があります。そういう意味で、研究や研修の機会を重視していただきたいと思います。同僚同士で学び合える校内研究会を重視していただきたいと思います。形だけ行う校内研究会ではなく、自らの教育実践の質的向上を図るための実質的な意味や意義のあるものとして捉えていただければと思います。旅費をいただいて研修できる職業など、他にはないことも改めて確認しましょう。学校教育目標や方針の下に、自分自身の業務や分掌は、他の教職員の業務とどのような関係・関連があり、学校全体の中でどのように位置付けられるのか、ということ意識して、お互いの力量を高めていければと思います。立場に関係なく学校全体を常に視野に入れて、自らの校務分掌や自分たちの分担において、どのような力量を自らの中に蓄えればよりよい学校づくりにつながっていくのか、と考えていただきたいのです。自分が興味・関心のある（ぜひ身に付けていきたい、もう少し勉強してみたいと思う）事柄が、学校全体や学年等の教育活動の質の向上にとって、どのように位置付けることができ、どのように貢献できるかと考えていただきたいのです。そう考えて業務を進めることによって、個人と組織がつながっていきます。

ただ、無理をする必要はないと思います。各自が自分のペース、自分のやり方で、少しずつ少しずつ進めていっていただければよいと思います。組織の教育力を高めていくことにおいて大切なのは、「自主・向上性」と「協働性・同僚性」の双方の高度なバランス、調和だということをまずは皆で心に留めて、そのことを共通認識にしていただければと思います。そういう教職員組織のことを「学習する組織」と呼びたいと思います。新しい時代の新しい教育の具体的姿は、先生方が、生徒たちが実際にいる教室から創造していくこととなります。立場や職はそれぞれ異なりますが、教職員の皆さん一人ひとりが、新しい時代の学校の姿を産み出していく当事者です。楽しく試行錯誤・創意工夫しながら学校づくりや教育実践を行っていきましょう。

⑥については、二つの意味があります。一つは、よりよい教育を創造するため、教育活動の「能率化・効率化」による「質の向上」ということを意識するということです。別の言い方をすると、一つの教育課題に対して、綱引きのように、同じ綱を皆で同じ方向に引くようにしたいということ。例えば、何かの行事（特別活動）があったとします。その行事における目標を達成するために、特別活動だけでそれを達成することを考えずに、各教科の授業では何ができるか、道徳の授業では何ができるかなどと考えてみるということ。命の大切さを考えさせる場合、道徳の内容項目、理科の授業、英語の授業、数学の授業、朝の会や帰りの会における自転車や登下校の指導、防災の指導などが考えられます。同じ課題に対して皆でいろいろな側面から同時に（横断的に）取り組むのです。そうすることによって、組織的な教育活動となり、皆で分担して教育効果を得るための「能率化・効率化」が図られると考えます。これはカリキュラム・マネジメントの一つの形だと思いますが、大々的で「大きな」カリマネではなく、多忙の中ですから、あまり無理をしない「小さな」カリマネを現実的に積み上げていくということによいと思います。こういった観点も意識しながら、先生方の教育実践を創意工夫していただけたらと思います。

二つ目は、一つ目とも関連しますが、働き方改革ということ。上記一つ目は、教育活動の能率化・効

率化によって働き方を改善していくということですが、働き方改革は、法令も含めた国レベル・自治体レベル、学校レベル、個人レベルと重層的に取り組む課題となっていると思います。先生方の個人的な生活や人生と教職生活が質的によりよくなるのが教育活動の質の向上につながります。学校現場では大変難しい面があることは重々承知していますが、少しずつできることからお互いに努力していきましょう。

最後の⑦ですが、これは、私たちが取り組む業務のすべての土台となります。学校業務に関わる職務上の義務と学校業務を離れたところでも義務となる身分上の義務が私たちには課せられています。そのことを改めて確認し、仕事を行っていきたいと思います。

以上、いろいろな側面から「目指す教師像」について述べてきましたが、これらを皆で心に留めて実際の業務に落とし込んでいくことが「危機管理」にもつながると思います。先生方の英知を結集し、東桂中学校の教育をよくしていけるよう、よろしく願いいたします。

－参考－

■教員の仕事は三種類

- (1) 日常的課題 …特に工夫も必要ない、日常的なルーティンワーク。
- (2) 改善的課題 …常に工夫改善を加えていく課題。
- (3) 大局的・未来的・戦略的課題…未来社会、我が校・教育の未来や在り方のために今行う必要のある課題。
 - ・教育成果の高い学校は、上記三つがバランスよく行われている。
 - ・教育成果の低い学校は、特に(2)～(3)において不協和音が働き、(1)のみでよしとする者とそうでない者が分断化され、教育成果が停滞もしくは下降している。

■「心理的安全性」を保障する要素

- (1) 話しやすさ
- (2) 助け合い
- (3) 建設的な挑戦
- (4) 新奇歓迎

■チームング（チーム学校）

プログラムやプロジェクト、目的や目標に応じてメンバー構成が異なる。その都度チームメンバーが異なり、多様な他者とその都度チームを組むことのできる個人の資質・能力が重要となる。常勤スタッフばかりでなく、非常勤、地域・外部機関の方々もひっくるめて、その都度チームメンバーが変化する。激しく変化する社会の中で、民間も公的部門も、そういう流動的な組織の在り方が現在は追究されるようになってきている。

■学校の教職員組織にありがちな組織タイプの傾向

教育指導の在り方を自ら探究するという仕事の性質上、個々のメンバーの独立性と分離性が保たれ、お互いに働きかけられればそれには応えるが、自らの考えや教育実践以外に目が向きにくくなり、自ら協働性や同僚性を積極的に創り出そうとする意識と行動が、日々の業務の中で発揮されにくくなる「疎結合システム」の組織。

《指導重点》

小学校から中学校までが一校で接続される本校においては、基本的には同一団体のメンバーによる進学とその後の中学校生活となります。このことによるメリットは、①進学時における友人関係の不安が軽減される、②団体の中での自分の位置づけが小学校時から比較的定まっておき、複数の小学校から進学する場合に比べ、団体における自分の位置をはじめから模索する必要がなく、比較的安定して中学校での団体生活に適応しやすい、③連帯感や所属感、団結力をより一層高めていきやすい、等があるように思います。このようなメリットを生かす教育により、現在、東桂中学校は、自治的な、本当に素晴らしい生徒団体となっており、落ち着いた学校生活を送っています。

しかし、何事もコインの表と裏の関係があるように、時と場合によっては、メリットは克服する必要のある問題や留意すべき問題となることもあります。そのような観点から本校教職員の話し合いの中で指摘された問題はいくつかありましたが、共通して指摘された最大公約数的な問題を課題化すると、以下のような内容でした。

1. 本校の実態から捉える教育課題（仮説・可能性）

- (1) 自らの発達可能性や個性の発揮が、「人間関係の固定化」による「それぞれの役割関係の固定化」によって狭められ、団体の中で限定化・階層化している可能性があること。
例：アメリカにおける貧困地区（社会における階層の固定化）
- (2) 安心して過ごせるお互いの関係性に身を置いていられる生徒はそれなりに過ごせるが、それが壊れてしまったり元々薄かったりする生徒は不適應を起こしている可能性があること（人間関係の固定化と幅の狭さ）。
- (3) 本校における従来の「あたり前」の教育方針や教育活動に乗り切れず、こぼれ落ちている生徒がいる可能性があること（ポストコロナで様々な教育活動が復活してきたときにどうか。）。
- (4) 学習活動に問題を抱え、学びづらさ、生活のしづらさを感じながら学校生活を送っている生徒がいる可能性があること。
- (5) 生徒や家庭環境が多様化してきており、生徒団体の支援レベル（一次支援・二次支援・三次支援）のバランスが、従来の（昔ながらの）団体内のバランスとは変わってきている可能性があること（支援ニーズのバランスの変化）。→かつてとは異なる団体づくりの難しさが存在していること。

－課題のまとめ－

- ★小中学校一校で9年間の義務教育期間を過ごすことによるメリットが、逆に、人間関係の固定化・役割関係の固定化・人間観の固定化を生み出し、本来多様な可能性を持つ人間の成長の機会を生かしていかない可能性があること。
- ★そのことにより、中学校生活における顕在的・潜在的な不適應、中学校卒業後の新環境における不適應のリスクが存在しているかもしれない、本来、享受できる成長が果たせないでやり過ごされている生徒がいるかもしれないこと。

2. 上記課題を踏まえた指導重点

- 団体の「安定度」と「活性度」の向上による「教育力のある懐の深い団体づくり」
「生活団体」と「学習団体」の一体的育成による個の成長支援（自立への支援・指導）

(1) 具体的取組の柱

WEBQU を活用した学習活動の質の向上

～「安定度」と「活性度」の実態とのマッチングを重視した柔軟な支援と指導～

(2) 具体的取組

①WEBQU の活用（安定度と活性度の向上）

ア) 年3回の実施

イ) 分析と活用（チームによる分析とチームによる活用）

②授業改善

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実による主体的・対話的で深い学びとなる学習過程の授業

ア) 単元全体で授業をデザインする。…バックワードデザイン（逆向き設計）によるデザイン

イ) 資質・能力の三つの柱立てによる目標設定と、その目標を実現している生徒の姿（評価規準）を描く。

ウ) 主体的に学習に取り組む態度の育成（家庭学習とのつながり）…まずは原理を学ぶ。

③二次支援の援助ニーズを持つ生徒の見極めと支援に、より焦点を当てるようにする。

ア) まず、質の高い一次支援（開発的・予防的支援）を行う。

イ) アを前提としつつ、「支援ニーズ（援助レベル）の判断→要因の検討」という流れで考え、検討し、実践する。

…「要因をまずしっかり見定めてから」では、見落とすものがある可能性がある。

例：いじめ問題の4割は特別支援の問題。中学一年生の不登校問題の3割は学力不振問題。

※複雑に絡み合う発達や養育の問題等の見極めが重要。しかし、複雑に絡み合う要因は、すぐには明らかにならない場合も多いので、「実践しながら見極めていく」という面も必要。

ウ) T2の先生方、支援員の先生、学力向上支援スタッフ、SAT等への共通確認・共通実践事項として取り組む。

④新たな自分と仲間の発見（人間観の涵養）

○リーダーとフォロワー、役割と責任のバランスよい体験。

○意図を持った生活班・学習班の編制

○必要に応じたソーシャルスキルの指導

⑤昨年度までの効果や成果のあった支援や指導の継続

—参考—

■現代の学校現場…子供集団における二次支援の子供の割合は、2割前後になってきたと言われている。

主な原因：先天的障害に関わる問題<家庭での養育の問題

※本校を例にすれば、およそ30人が二次支援対象生徒ということになる。

■各支援の概要

一次支援…すべての生徒に対して行うもの（予防的・開発的）。

二次支援…一部の生徒に対して行うもの（援助ニーズの大きい生徒に対して、問題が大きくならないために予防的に支援を行う。）。

三次支援…特定の生徒に対して行うもの（不登校・いじめ・非行への対応等）。

■生徒による支援ニーズ

○一次支援を必要とする生徒

・目立った問題行動がなく、不適応感も少なく、一斉指導や全体の活動に自ら参加できる生徒

○二次支援を必要とする生徒

・現時点で問題行動は表出していないが、内面に問題を抱えていたり、不適応感が高まったりするので、トラブルや不適応を未然に防ぐためにも、一斉指導や全体の活動の中では継続的にさりげない配慮が必要な生徒

○三次支援を必要とする生徒

・すでに問題行動が表出しており、学級内で、一人で自立して生活や活動ができない状態で、個別に特別の支援が求められる生徒

<包括的教育指導重点課題（教育活動取組の観点・視点として）>

赤字：特に重点を置きたい課題

黄帯：本年度より留意しておきたい重点課題

1. 学級経営・学年経営の充実

- ◎ すべての土台となる学級経営を充実させる。
- ◎ 自己肯定感・自己有用感(所属感)が持てる取り組みを実践する。

- ① 教師と生徒との信頼関係及び生徒相互のよりよい人間関係を育てる土台となる、学級・学年等の集団づくりに取り組む。
- ② 生徒が所属感、自己有用感を持つことができるよう、集団・個人として課題解決に向けた目標や方法・内容等をまとめたり、決定したりする活動に取り組み、一人一人のよさや可能性を生かすように努める。
 - 【学習活動】自分の意見を持ち、仲間の中で意見が言える主体的・対話的で深い学びの実現
 - 【人間関係】自分の大切さとともに、他の人の大切さを認める態度や行動の育成
 - 【環境】互いの良さや可能性を発揮できる取組を通し、安心して過ごせる学校・教室の創造

2. 確かな学力の育成

- ◎ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に努める。
- ◎ ICTを最大限に生かした授業の充実に努める。
- ◎ 適切な評価による学習改善と指導改善および不安のある生徒への適切な支援に努める。

1) 授業の改善

- 学習者を主体とした授業づくりを行い、自ら課題を見つけ解決に向かう力を高める。
- 言語活動の充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に努める。
- 生徒が自ら学習状況を把握し、調整しながら粘り強く取り組む姿勢を育てる。
- 教科の目標を実現させ、発達段階を考慮した情報活用能力を育成する。
 - ICTを最大限に生かした授業の充実に努める。
- 生徒の読解力・記述力を高める
 - 授業において複数の情報を関連付けながら自らの考えを記述する内容を取り入れる。

2) 教育課程の評価・改善

- 義務教育9年間を見通した教育課程を検討し、小中連携による効果的な指導の実現を図るため小・中学校合同の研究会等を実施する。
- 「主体的に学習に取り組む態度」の評価
 - 教師と生徒間における明確な評価規準や評価方法の共有と適切な評価の実施
 - 2つの側面の評価
 - ① 知識・技能、思考力・判断力・表現力を身に付けようとする粘り強い取組に対する側面
 - ② 粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとする側面
 - 「生徒の学習改善」・「教師の指導改善」に繋がるという視点
 - 一時点の見取りで評価せず、一定期間の捉えを積み重ねた評価
 - 評価を通して「主体的に学習に取り組む態度」を育てる視点
 - 単元の終わりに全体の振り返りを実施
 - 取組に不安のある生徒への適切な支援

3. 豊かな心の育成

- ◎ 土台となる学級(学年)経営に重点を置く。
- ◎ 一人ひとりが活躍できる場を設定し、達成感・自己有用感を育む。
- ◎ 生徒に寄り添うとともに、課題の本質を見極め、組織として解決策を考える。

1) 人権教育・道徳教育の推進

- 自他の大切さや多様な価値観等を尊重できる人権感覚を涵養するため、生徒の個性や地域の実情に応じて教育活動全体を通じて人権教育への取組を促進する。
- 道徳教育の方針・重点、教科等との関係などを明らかにした全体計画を作成し、推進教師を中心に、全教師が協力して教育活動全体を通じて道徳教育を推進する。

2) いじめ・不登校への対応

- 生徒が安心して学校生活を送ることができる環境づくりを推進するため「学校いじめ防止基本方針」に則り、いじめの早期発見・早期対応を図る。(学校いじめ基本方針の見直し)
- 様々な困難や悩み、ストレス等への対処方法を身に付けるため、「SOSの出し方に関する教育」「自殺予防教育」について取り組む。
- SC、SSW等の活用を推進し、校内スタッフや関係機関との連携を図る。
- 生徒が継続的な指導や支援が継続されるよう、異校種間で情報交換等の連携を図る。
- いじめを許さない集団づくりと不登校生徒一人一人に対応した校内研修に取り組む。
- インターネット上のいじめが重大な人権侵害だと理解させる等、情報モラル教育を推進する。
- 不登校を未然に防止するため保護者等と連携し、欠席が続く生徒への対応を組織的に行う。
- ヤングケアラーの早期発見・状況把握に努め、関係機関と連携を図り生徒を支援する。
- 自己肯定感を育み、いじめや不登校が生じにくい、居心地のよい学級づくりを推進する。

4. 健やかな体の育成

1) 体力の向上

- 運動習慣、朝食摂取、十分な睡眠等、望ましい生活習慣の定着を通じて体力の向上を図る。
- 各学校の課題を踏まえた「健康・体力づくり一校一実践運動」に取り組む。

2) 健康教育の充実

- 健康に関する指導を、体育・保健体育をはじめとする各教科や特別活動、総合的な学習の時間等と相互に関連させて実践する。
- 各学校の食に関する課題に応じた目標を設定し、課題解決に資する取組を計画的に行う。
- 感染症への正しい理解に基づき、自ら適切な行動をとることができるよう、具体的・実践的な指導を継続して行う。

3) 安全教育の推進

- 安全教育に係る取組を評価・検証し学校安全計画及び危機管理マニュアルの見直しを行う。
- 生徒が自分で自分の身を守ることができるよう、安全教育の実践に取り組む。

5. 地域や世界で活躍できる人材の育成

- ◎ CAN-DOリスト形式による評価を計画的に実施する。
- ◎ **キャリアパスポート**を活用する。

1) 伝統や文化等に関する教育の推進

- 『ふるさと山梨』の活用や地域との連携等により、郷土学習を推進する。

2) 外国語教育の充実

- 「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」の4技能5領域の言語活動を着実に実施し、コミュニケーション能力を育成する。
- CAN-DOリスト形式による学習到達目標を基にしたパフォーマンス評価を計画的に実施し、総括的評価に生かす。

3) キャリア教育・職業教育の推進

- 「やまなしキャリア・パスポート」を活用し、年度始めや学期末、年度末などの節目の時期に目標設定や振り返りの場を設け、学年・校種間の学びをつなぐ系統的な取組を実践する。

6. 特別支援教育の推進

- ◎ 校内での情報交換を密に行う。
- ◎ 一人ひとりの特性を共通理解し、それぞれに合った配慮を実践する。
- ◎ **専門機関との連携を充実する。**

1) 専門性の向上

- 特別支援教育に関する理解促進と専門性の向上のため、学校の実情に応じた研修会を実施する。

2) 教育内容の充実

- 交流及び共同学習等、障害(者)理解教育を含め、多様性を認め合える集団づくりを行う。
- 特別な支援が必要な生徒には、個別の教育支援計画を作成・活用し、支援内容の検討及び評価を行うため、適切に校内委員会を実施する。